

強気で自分最強と思っている受けが、 圧倒的に強い攻めに完敗して徹底的にイ カされまくる話

体験版

真面目風体格良しテクニシャンリーマン×遊び人強気ビッチネコ青年

攻め：颯生（そよぎ）

受け：ミサキ

要素：強気受け、連続絶頂、耳責め、お風呂エッチ、受けフェラ、前立腺責め、
言葉責め、結腸責め、亀頭責め、立ち膝バック、密着寝バック、玩具

冬は人肌が恋しい日が増えると思う。季節関係なく俺がムラついているだけなの
かもしれないが、こういう日に限ってなかなか馴染みの相手が引っかからない。
全員からお断りを入れられたので、仕方なく行きつけのバーに足を運んだ。
ただ、相手を探そうにもカウンターは空いていた。必ず誰かと出会える保証がな
いのだから当然だが、今日はとことんツキに見放されている。この分だと誰とも
会えず家にとんぼ返りになるなど、がっくり肩を落とした。けれど意気消沈する

俺の背後から、すいませんと声がかかる。振り返ると、初めて見る男が立っていた。

「あの...、すいません。ここ、座ってもいいですか？」

礼儀正しく話しかけてきたのは、ガタイのいいスーツ姿の男だった。見るからに男らしい体つきだが、顔つきがイカつくからパッと見では優しそうに感じる。包容力の高そうな人だと思いながら、下から上まで扎扎实ち値踏みをする目線を向けた。もちろん合格ラインを大幅に超えていたので、にっこり笑って左隣を空ける。

「見てのとおりに空いてるよ。座って座って、俺はミサキ。よろしくね」

「ありがとう。俺は颯生。ミサキさんはここによく来てるの？」

「え〜、さん付けとか距離感じる。ミサキって呼んで？」

「じゃあ、俺の事も呼び捨てで呼んで？それ、ミサキが今日飲んでるのは何？」

「これはモヒート。颯生も同じの飲む？」

「うん、じゃあ一緒にしようかな」

隣に座った彼と軽い会話をしつつ、乾杯までこぎつけてサクッと距離を縮める。こういう一夜の出会いには慣れたものだ。お互いある程度下心がある前提で酒が入るから、普通の場所なら過剰と思える触れあいも許される。俺はわざと腕を颯生にくっつけながら、じりじりと物理的な距離も縮めていった。

「颯生、あんまり見ない顔だよね。いつもは他のバーに行ってるの？」

「いや、全然だよ。このお店には初めて来たし、そもそもこういう店が初めてなんだ。俺、住んでいたところが田舎でね。地元にはゲイバーなんかなかったから、転勤で都会に来たし、どんなもんか見に行ってみようと思って。そしたら、かわいい子がいたわけだけど」

「なにそれ俺の事？口説いてんの？」

「そう思ってもらってもかまわないよ」

ただ、俺がぐいぐい迫っても、颯生はちっとも嫌そうじゃなかった。むしろ大歓迎って感じで、向こうも膝をつけてくる。どうやら今日がゲイバーデビューらしいけれど、それなりに男との経験はありそうだ。俺より年上に見える颯生は、ただ卑猥な下ネタを言うおっさんくさはなくて、適度にいい大人って感じで印象はかなりいい。

あんまり若いとガツガツしているけれど、ねちっこいおっさんは苦手。そんな俺にはピッタリの相手じゃないか。それでいてちゃんとやる気はある。いい、とてもいい。ワンナイトの相手には最適な相手が転がってきた。これはバーに来て正解だったなと、俺は早々にしかけていく。

「俺ね、今日めっちゃ寂しい日でさ？誰か慰めてくれる人いないか探してたんだけど、せっかくなら優しくて男らしい人がいいじゃん？」

腕を絡ませて、甘えた声で擦り寄っていく。ここで向こうが身を引かなければ、ほぼ落ちたも同然。ここで俺がちゃっかり膝から太ももを撫でて、足の付け根を

くすぐったら、大体の男は唾を飲む。もちろん颯生もそうだったから、内心でしめしめと笑った。

「ねえ颯生、俺とここ抜け出して、いいところ行かない？」

店の周りにはここと似たようなゲイバーも多いし、そもそもそういう性癖の人が集まる街だ。だから一般のホテルとは違って、同性OKのホテルだらけ。店を出て3歩進めば、右も左も選び放題。期待感が爆上がりしてる純朴サラリーマンとの、熱い夜まではあと30分もかからないだろう。

さあ、これは楽しくなってきたと、マスターに声をかけて清算するまでの間、欲しがりな目で彼を見つめていた。

時期的にホテルは埋まりやすそうだったけれど、ラッキーは続いて一発目のホテルですぐに空き部屋が取れた。タッチパネルで良さそうなところを選んでから、適度にいちゃついて部屋に入る。ここまで来て「何するの？」ってかまととぶるような二人ではないから、お互い素早く服を脱いでキスをした。一緒に飲んだ酒の味が混ざると、俺もだんだん興奮してくる。順番にシャワーを浴びるのすら億劫で、俺たちは一緒にシャワーを浴びることにした。もしもの時はすぐにできるように中は洗ってきたから、さっさと一発やってしまいたい。

「ねえ颯生、俺もう待てない」

「こらこら、こんなところで」

「ダメ？早くほしいもん、これ」

見た目からして良い体を持っていそうな颯生は、かっちりしたスーツを脱いだら、期待通りの筋肉質な肉体を披露してくれた。そして体格に釣り合う立派なものを見て、今度は俺が唾を飲む番だった。なんてデカイものをぶら下げてるんだ。それが本気になったらどれほどのものかと待ちきれなくなる。たまらず彼の熱に口をつけると、立っていた颯生は俺をたしなめながら床に座り込んだ。

「ん、ん、すごい、おっき...！」

「その小さい口には、全部入らないかもね」

「んっ、ね、喉まで、いっぱいになりそ...！」

「ミサキがえっちで嬉しいよ。俺も早くここに入れたくなるね」

「ッ、む！？」

けれど、何もかも俺のペースで事を進めようと思っていたのに、ここでハプニングが起こった。初心そうに見えた颯生が、なんのためらいもなく俺の臀部に手を回して、ぬぷりと指を埋め込んでくるじゃないか。しかもいきなり興奮して入れるんじゃないくて、ボディソープで滑りを足す余裕もある。場所を探して指一本だけ入れてくる、手慣れた手マンへの進み方だった。ぬるりと入ってくる指の感触に、俺はつい身体を弾ませてしまう。自然な流れで急所を責められて、ひくっと頬が引きつった。

「へ、あ、あ、や、いって、そっちはもう家でキレイにしてるから」

「そうなの？じゃあ、バーにいたときから準備万端だったんだ。ここ弄ってほしいなって思いながら、俺に話しかけてたの？」

「ひう、ううんっ！？」

そして颯生は、かなり早くから俺の前立腺を見つけてきた。最初はたまたま擦れただけかと思ったけれど、つい、つい、としこりの上を滑る指は明らかに狙いを定めている。嘘だろ、コイツ上手いと、動揺して表情を作る心のゆとりがなくなっていく。俺とは初めて会ったのに、どうして瞬時にいい場所を見抜いてくるんだ。くそ、慣れてる、颯生は思った以上にやり手なのかもしれないと、徐々に自分のペースを乱されていく。

「あ、あ、んん...っ！ちょ、あんまりされたら、舐めれないって！」

「舐めれないくらい気持ちいい？ミサキは敏感なんだね。お尻が好き？」

「っ、は、あああ...！？あ、や、やあっ！？」

いつもの俺なら、よっぽど向こうがガッツいてこなければ、手早くフェラをして、お互い抜くか、一発やるかの流れだ。それで物足りないならもう一回して、よかったら連絡先を交換して、即解散。この王道ルートに今日も乗っていたはずなのに、なぜかレールから脱線しそうになっている。

指一本でも口が動かなくなるほど感じさせられていたのに、更に増えた指が俺の前立腺を揉んでいる。ぬるぬる、ぬるぬると中で動く2本の指は、時に上下に引っかけては、ばらばらに擦ったり、挟んでひねってと、多彩な責め方で俺を翻弄してきた。なにそれ、やばい、なんかめっちゃくちゃ気持ちいいと、思わず床に肩をつけて喘いでしまう。もう颯生の熱を舐めるどころじゃなくて、ただ握るだ

けになってしまって悔しい。なのにこれほど感じていても、颯生の指が俺をかき混ぜる速度は緩まないから、自分ばかりがどんどん高まっていく。

「ひぐっ、う、ッん、んんん！んは、は、や、待って、ちょっと待ってえ...！」

「中がきゅうって締まるようになってきた。もっと指増やしてみようか」

「や、いい、いあ、あああああっ！んんんう！うう～～っ！！」

「ぷるぷるしちゃってかわいい。ミサキのえっちなお尻、どんどんエロくしてあげる」

「ッ、～～～んああああ！！」

3本に増えた指が、ゆっくりと弱点を擦っていくのも相当良かった。ぐちゃぐちゃと音が立つほど引っかけられた場所への、甘やかな刺激がたまらない。なんだよそれ、良すぎて声が勝手に漏れていく。擦られる度に腰がゾクゾクしてやばいと、全力で感じてしまった。ガクッと彼の前に崩れて、舐めるはずの熱から口が離れる。それでもなんとか手は動かそうとしたのに、後ろに入る指が丹念に前立腺を揉みこむから、単純な手コキもままならない。

なんてエロい指だ。腰が落ちて、へなへなと彼に屈服するように床に這いつくばってしまう。ずり、と自分の頬を擦っていく熱を刺激したいのに、後ろからの快感に耐えるので精一杯だ。どうなってるんだ、颯生は田舎から出てきた純朴サラリーマンじゃなかったのかと、彼の太もものにしがみつकिながら困惑していた。真面目そうな颯生の指使いはどう考えても上級者のそれで、いっそ彼の風貌が遊び人であった方が納得がいくレベルだ。

「ひぐっ、っん、あ、ああ、や、あああああ...っ！！あ、そこ、もう、も、おっ！」

「ところで、聞き忘れてたんだけど。ミサキはお尻でイける子？」

「っく、う、んッ！！イける、けど...！」

「そう。なら、せっかくだからここだけでイっちゃうミサキが見たいなあ」

「っ、っっ！！？」

ぐにい、と前立腺が押し込まれて、そのまましつこく擦られた。ぐうっとせりあがる快感に、背骨が上方向にしなる。まだ始まったばかりなのに、声も出ないほど感じさせられるなんて。

確かに俺は後ろでもイける。ただそれは可能か不可能かの話で、通常はそう簡単にイけない。前なら擦ればその気がなくても出せるが、後ろだけで達するとなると話が別だ。

けれども颯生は、あっさりと俺を高みまで連れて行った。しかも無理やりじゃない。気づけばいつの間にか、かなりの自然さだ。やばい、なんかやばいと身構えても、既に遅かった。ガクガクガクッと腰が上下に揺れて、きゅううう、と颯生の指を締め付けてしまう。ああ、くる、大きめのが来ると目をつむれば、颯生は空いている手で、俺の脇腹から臀部にかけてをそっと撫でた。汗ばむ皮膚を滑る優しい指先に、完全にしてやられてしまう。

「んは.....ッ！！あ、んううううっ！！」

絶妙な時に、微弱な快感が与えられて一気に来た。ぞわっと全身が震えて力が抜けると、関所が崩れて速攻でイッてしまう。ビリビリと腰から下が痺れて、頭が軽くなった。ふわりと脳が空っぽになったような感覚の後、ようやく呼吸ができるこのイキ方は、まぎれもなく中イキのそれだ。

「んは、は、はあああ...！っ、ん、んう...！」

「すごいすごい、本当にイケるんだね。今のはイッたふりじゃなかったなあ」

「っ、だ、から、イケるって言った...！」

「ね、ミサキは正直で感じやすくっていい子だ。いい子だからもう一回イかせてあげる」

「ひゃ、あうううっ！！？」

ただ、単なる興味で俺をイカせてきたかのように見えた颯生は、絶頂した直後の中をかき混ぜてきた。まだ震える内部を、3本の指がばらばらに混ぜる。それに露骨に声を上げた俺を嬉しそうに撫でる手は優しいのに、中の指が優しくない。ぬりぬりぬりと、俺の前立腺を集中的に狙っている。ビクッ、ビクッと不自然に身体が跳ねていても、彼の手に容赦はなかった。

「くひ、い、ああああああっ！！まっ、指、もおっ！！」

「またヒクヒクしてきた。一回イッたから、まだ収まってないのかな？ミサキはどれくらい連続でイケるか試してみる？」

「いゝ、い、そんなの別にっ」

「じゃあまずは、2回からカウント始めようか」

「っぐ、あ、ツツツ！！？ひ、んんんんンン っっっっ！！！！」

イッてからすぐ、間を空けずに弄られるのなんて、誰しも耐えられるわけがない。しかも前でイクよりも、後ろでの絶頂は熱が引くのが遅いのに。完全に冷めきっていない状態で責められたら、簡単にイクに決まっている。

嫌だと、心の中では思っていた。なのに身体のストッパーが外れていて、全然歯止めが効かない。くに、くに、とわざと会陰を押されると、外側から前立腺を刺激されるからゾクゾクの度合いが加速する。そんなところも狙ってくるのかよと怯える間も、しこりを揉みこむ指が動いていた。ふざけんなよ、こんなの耐えられるわけがないと、俺は首を強く振り乱しながら2度目の中イキを迎えてしまう。

「はう、ッ、うゝ ～～～～...ツツ！！んふっ、ふ、ふっ、ううう...！」

「いいね、ミサキがちょっと悔しそうにイク顔が好きだな。もっと見せてもらっていい？」

「ッ！！？や、いい、も、一回落ち着い」

「少し遠くて寂しいね。ほら、こっちにおいで」

「やっ、やあっ！！」

2回も強烈な絶頂を味わった俺は、膝に力が入らず、べちゃりと颯生の前に伏せた。そんな俺を持ち上げた颯生は、胡坐をかく自分の上に俺を乗せて、正面で向かい合う格好にする。下半身を支えることができない俺は、ペタンと彼に座る形になるから、なんとなく具合が悪い気がした。あれ、これってちょっとまずく

ね？と、俺は慌てて手を後ろに伸ばして彼から離れようとしたけれど、颯生の腕が腰に巻き付いたせいで、距離を取る作戦は失敗に終わる。

「ッ！なあ、いいってもう！そんな連続で俺ばかり」

「ううん、まだ2回だけだ。これは連続って言わないよ？」

「ちがっ、だから颯生もっ」

「俺はミサキがぐずぐずになっちゃうのが見たいかな？」

「あふうううっ！！？」

そして身体を離すことができなかったせいで、せっかく抜けた指が再び入れられてしまった。最悪だ、さっきよりも責めやすい体勢になったのに、俺の自由が減っている。抱きかかえられながらお尻を好き勝手に弄られる俺は、どうにか颯生の肩に腕を乗せたり、背中に腕を巻きつけて腰を浮かせようとしてみた。でも颯生は体格もいいから、すっぽり収まる俺は逃げられない。むしろ力強く抑え込まれると、生き物としても負けた感じがして、気持ちが小さくなっていく。

「ひっ、ああ、やっ、いや、やあああっ！！」

「ううん。そんなことない。ミサキのお尻、ずうっとヒクヒクしてるよ？全然嫌がってない。気持ちいい、気持ちいいってえっちに喜んでる。ほら、ここクリクリされたらイクの我慢できないね？」

「んは、あ、あゝ、ああっ！！だめ、イク、イク、や、あ、またイッちゃううう...っ！！も、やえ、ッ、~~~~~っっ！！！」

3度目の絶頂に入ったときは、自分の身体のコントロールもできないくらい頭が真っ白で、颯生の腕の中で必死にもがいた。それでも全く意に介さない颯生は、つつ、と俺の背筋を指先で撫でたりしてくる。ビリリと骨を伝う鈍い快感に、一瞬白目を向きかけた。

なんだよ、なんなんだよこれ。まだ入れられてもないのに、今失神しかけたぞ。どうなってる、スーツなんて着て真面目ぶりやがって。お前、ただのドスケベじゃねえかよと、颯生を睨んだ。

ゲイバーデビューなんて言うから、舐めてかかった俺が甘かった。こいつは慣れてる。しかも、相当上手い。このまま好きにさせたら何が起こるか分からない。だが、面倒な相手にはそれなりの対処法がある。こういう相手は長期戦になるほど辛いので、できるだけ早く終わらせるのが吉だ。だから俺は、性懲りもなく俺の中をかき混ぜる指に耐えながら、彼の熱を握って先の行為をねだった。

「いあ、あああ、も、いゝ いいっ！！俺、イッた、イッたからあっ！早く入れろ、時間なくなる、ホテルの、時間がっ」

「ああ、そういえば2時間で取ったんだっけ。でも気にしなくていいよ？延長になっても、宿泊になってもいい。お金は俺が出すから気にしないで？」

「んあ、っ、や、あ、ううううう...っ！いい、入れて、も、っ、っくうう！！」

だけれど決死のおねだりも払いのけられて、俺はただただ絶望した。短期決戦に持ち込むはずが、長丁場の覚悟をしなければいけなくなったかもしれない。本当だったら、俺が颯生をその気にさせて、舐めながら焦らしたり、先端を孔に当てて擦ったりして、物欲しげなコイツの顔を見下ろす予定だったのに。その一

歩目すら上手くいなくて、4回目の絶頂が迫っているのは俺だ。行為を終わらせるためとはいえ、先にねだったのも俺だ。なんで今日はこんなにも予定が狂う。おかしい、颯生が慣れ過ぎていておかしいと、太い腕の中で手足を振り乱す。

「んあああゝ あゝ あああっ！！や、もう、イッ、た、いっぱいイッたからあっ！！だ、め、颯生も、颯生も、ぎもち、ぐ、な...ッッ！！」

「お尻でイクと、何回でもイケるよ？俺のことは気にせずもっとイキな？」

「っっ！！ぎ、いっ、んんんっ！ふは、あゝ、や、いらない、もおい、いゝっ！！」

「もしかして、連続でイクの苦手？意外、ミサキは欲しがりなタイプかと思ったのに。それとも単に、手マンでイカされるのが恥ずかしいのかな？」

「~~~~ッッ！！」

恥ずかしいとか、恥ずかしくないの問題じゃない。俺はこんなにイカなくていいと言ってるんだ。計算違いだ、俺は別に弄ばれに来たんじゃない。一発やってスッキリしたかっただけなのに。なんでこんなに、俺ばかりが乱れる展開にならなきゃいけないんだ。

そう思う間も、颯生の指が俺の中をかき混ぜている。絶頂の連続で痙攣の止まらない内部を、ぐちゃりと円を描くように混ぜられた。ぐりっと押し込まれる前立腺から、頭にかけて快感の弾丸が飛び出したみたいだ。脳天まで突き抜けていく絶頂感に、俺は一瞬意識を奪われる。

「んはあゝ...っっ！！！？あ、う、うううんっっ！！っぎ、っ、っっ...！」

「うわ、すごいイキ方してたよ今。エッチだね、お尻で感じすぎて飛びかけた？」

「ッ、ぐ...！？は、はっ、はあああ...！」

視界がホワイトアウトして、何もかもの色が飛び散ってから、また俺の元に時間が返ってくる。体感的には短い時間だったけれど、数秒は飛んでいたのかもしれない。でも、ギリギリ意識を保ててよかった。もしここでぶっ飛んだら、颯生からもっと過酷なことをされていたかもしれない。

とはいえ、俺の負ったダメージはかなり深い場所まで届いていた。手足も動かなければ、言葉もまともに話せない。肩を掴むこともできず、カリカリと背中を滑る指が情けなかった。

「ひ、っ、あ、だ、え、もおっ...！」

「くたくたになっちゃった？ミサキは溶けてる顔もかわいいね」

「んやっ、あ、ううんっ！」

そして末端が特に使い物にならない俺とは対照的に、颯生は器用な指先で、俺の乳首をつまんできた。きゅ、きゅ、と優しい力でつねって、些細な刺激で跳ねる俺を楽しんでいる。

あとはコイツのムカつくポイントとしては、乳首責めも普通に上手いことだ。もっと力強くつねってくれたら、痛えなと思うだけで済むのに。あくまでゆっくりと、なんならその手にもボディソープを纏わせて、摩擦を減らしてきたりす

る。ぬるぬるの指の腹が、乳首の突起を撫でていくのが気持ちよくて、俺はつい自分の中を締め付けてしまう。それが増々、俺を追いつめることになるのに。

「ふぁ、あ...！ッ、や、も、やめ、ろ、やめろよぉ...っ！」

「やめてほしい？もう嫌？」

「っ、ベッド、行きたい、もう、ベッドに」

「そうだね。あんまりここにいたら身体が冷えるかもしれない。じゃあ身体をきれいにして、ベッドに行こうか」

でも、やりたい気持ちが颯生と一致しているのはせめてもの救いだった。あくまでコイツも、俺と同じで一発しなきゃ気が済まないはずだ。だったら俺に入れるためにベッドに移動するのは合理的だし、ここでの行為も一区切りにする必要がある。

よかった、なんとか乗り切ったと、俺は彼の腕の中で力を抜いた。指も抜けていったから、なおさら油断した。どうかなったと思ってしまった。だからコイツが俺を抱えてシャワーの傍に近づいても、一切の警戒心を解いて目をつむってしまう。

「それじゃあ泡は流していかないとね。はい、じゃあまずはここから」

「ッ、ひ！！？」

昔の人は、油断大敵と良く言ったものだと思う。そしてそれを、俺も肝に命じておくべきだった。だってほんの少し防御態勢を取っていれば、俺は乳首にもろに

シャワーを当てられる事もなかったし、壁と颯生に挟まれて、退路を塞がれることもなかったんだから。

「いや、やっ、いい、もう流れたからっ！」

「そう？でもここ、ちゃんと洗えてなかったかもなあ。もう一回洗わせてもらってもいい？」

「は！？そこはさっき洗って、っ、やめろ、もう触んなっ！」

「こらこら、そんなに暴れたら滑っちゃうよ？」

「ッ、や、や、あああああっ！！」

しかも背後の壁が頑丈なのはともかく、前にいる颯生も俺にとっては大きな壁だ。そもそもの体格差があるから、コイツから壁側に押し付けられたら、全然身動きが取れない。どう考えても不要な洗体を拒みたいのに、俺の手が届くのはコイツの背中ばかりで歯がゆい。

ぬちゃりと滑る手が胸や熱を擦っては、しつこく高められて、イッている途中でシャワーを当てられたりもする。それが新たな汚れとして判定されて、また洗われての繰り返しだ。ふざけんなよ、こんなの一生汚れ続けるだろ、ここで枯れるまでやる気かよと、逃げられない檻の中で散々わめき散らした。けれど颯生が落ち着いているから、風呂場には俺の声ばかりが響いて、ひどく惨めな気持ちになる。

「ひいゝっ、あ、イク、う、うゝ〜〜〜ッッ！！んは、あ、あああああっ！！

や、イッで、る、イッてんのにいいいいっ！！」

「うん、でもほら、汚れちゃうから」

「ッ、はひ、い、だめ、ダメダメダメッ、も、おがしく、な、あ、ひいい
いっっ！！！！は、はっ、っ、んううっ！ンンうううううっ！やめ、ろ、も、い
い、もおいしいからあっ！」

「ダメだよ、汚れたところはきれいにしないと。さ、足を開いて？まだ中が流せてないよ？」

「ッ...！」

そして一番苦しかったのは、中を流すと言われてからだった。このネチネチ魔人がただお湯をかけて終わるわけもなく、俺の中には指が入ってきて、明らかに洗う目的を見失った中指が前立腺を擦ってくるわ、熱にシャワーは当てられっぱなしでまた全体が汚れるわで散々だ。なんなら乳首も舐められ始めて、俺は浴室の中でどの夜よりも激しくイカされていた。

数えきれない絶頂に耐えた身体は、颯生との触れ合いが終わっても言うことを聞いてくれなかった。妙なタイミングで跳ねるばかりで、四つん這いになることすらできない。

「ん、あ、ああ...！はふっ、ッ、あ、あう...！」

「ふう、スッキリしたね。それじゃあベッドに行こうか」

「あ、あゝ あ...ッ！」

脱力して動けない俺を抱える、颯生の力は優しい。それが逆に怖い。だってコイツは、さっきまで俺をめちゃくちゃにイカせてきた男だ。なのに気持ちいいくら

い爽やかな笑顔で、身体や髪を拭いてくるのはなんなんだよ。その完璧な彼氏面の内側で、俺をベッドでどう抱いてやろうかって考えてんだろ。やばい奴だよ、こいつは絶対やばい奴だと頭で理解しているのに、過度な絶頂の余韻が残る肉体では、屈強な颯生を振り切ることはできない。

そして身体を拭いた俺たちは、バスローブすら着ず全裸のまま移動した。どさりとベッドに倒れこんだ俺は、颯生から仰向けに向きを整えられる。そのまま膝を立てられた俺の孔には、固く膨らむ颯生の切っ先が当てられた。

「っ、颯生！お、俺まだ、待ってほし」

「ん？いいよ。ミサキが大丈夫になるまで待ってあげる」

「っえ、ゃ、入る、入るって！そんなに押したら入っちゃ、んううううううっ！！？」

俺としては、入れるのはいいにしても、まだ休憩が欲しかった。けれど人の言うことを聞いているようで聞いていない颯生は、俺の願いを跳ねのけて挿入してくる。いやいや、確かにそのサイズでも入るが、そうじゃない。風呂場でかなり慣らしてきたから傷も付かないと思うけれど、俺は入れるなと言ったんだが。待てが聞こえなかったのか、四の五の言わずに抜けよと、彼の肩を押し返して抵抗の意思を示す。

「んは、はッ、あああ...！な、んで...っ！？なんで、入れっ」

「あれ？入れてから馴染むまで待ってって意味じゃなかった？」

「ち、違あ...！まだ、残って、さっきイットのが、まだ」

「へえ？このえっちな孔は、まだお尻イキ引きずってるんだ。でもミサキのここは、もっともっとなんて言ってる。軽く押すだけで、俺のをどんどん食べちゃうよ？」

「ふぁ、あ、あ、あああっ」

だが、俺が今出せる全力で押し返してみても、颯生はびくとも動かない。それどころか、ぐい、ぐい、と腰を押し付けられて、どんどん中まで熱が入りこんでくる。やばい、じわじわ入ってきてる、太いのが壁を広げて奥まで来るの気持ちよすぎると、俺の手は徐々に彼の首に巻き付いていった。

「ひ、う、うう、あ、ん、デカイ、颯生のお...っ！」

「ミサキのお尻もお利口さんだよ？遊んでるって感じなのに、ちゃんと俺のを締め付けてくるし。こっちこっちって、奥まで誘ってくれてる」

「んふっ、で、でもまだ、そんな奥は」

「うん、焦らずじっくり入れていこうね。まだまだ時間はあるんだし」

「ああ、あ、ッ、んん、んんうう...！」

ぬっ、ぬっ、と進んでくる熱い塊が、時々いい場所を擦るのがたまらない。口からは自然と媚びた喘ぎが出ていく。この犯されている圧迫感と、俺に入れて夢中になる相手の顔を見る時間が好きだ。お互いが気持ちいいことだけに向きあっている感覚に、途方もなく興奮する。ただ今日は、颯生が俺の虜になっている気がなくて癪だが。

けれど、俺はある程度緩んだ快感によって、またしても心の防御を弱めていた。
あれほど抵抗したほうがいいと思っていたのに、自分で装着した鎧が一枚、また一枚とはがされて、生身の俺をむき出しにされていく。

「はあ、あ、すご、い、じわ、って、くる、颯生の、すごい...！」

「ここも好き？」

「や、やっ、そこ、あんまりしちゃだあ...！」

「本当？嫌じゃないって顔してるよ？」

「んっ、んんんっ、あ、は、あああああ...ッ！！」

上から蜂蜜を垂らされるような、甘い甘い快感で満たされると、いろんな事がどうでも良くなっていく。ああ、良い、やっぱりセックスって最高だと、俺の方から颯生にしがみついていた。それに応えるように、颯生が俺を抱き返してくるのも良い。

でも、その力が段々強くなって、さらには腰の動きも加速していくのが少々気になった。あれ、これってここで打ち止めの速さなのか？それとも更に速くなるのか？あと、なんか動けないくらい抱きしめられてないか？颯生も集中して、力加減が分からないのか？コイツに限って、そんなことがあり得るか、今更になって状況が良くないことに気が付き始めた。

「ひ、う、っ、あ、あ、あっ、ま、颯生、だめ、激し、い、ん、んんうっ！」

「ん、かわいい、またいっぱいお尻で気持ちよくなろうね」

「ッ、あ、ゃ、そこ、そこは許しッ、んん、んんうううっ！！っひ、ああ、あゝ、ああああっ！」

俺が気を抜いている間に狙い撃ちされていた前立腺は、いまやただの弱点となり下がって、颯生に何度も押し込まれている。ゴリリ、と強く擦られた後に、淡々と掘られると喉が詰まった。えぐくらい感じる。ちょっとは外せ、お前なら外すことだってできるだろうと、自分のサイズに合わせた牢獄の中でもがく。けれど鉄格子より圧倒的に柔軟な素材でできている檻は、俺の抵抗を容易く無力化する。そして防御だけでなく攻撃機能も備えているから、泣きわめく俺の唇までもを捉えてきた。

「はふ...っ！ん、んっ、ふ、ッ、っ、ん、んんんっ！！」

拒めない時間にされるキスなんて、一方的で横暴だ。誰がお前とキスしたいなんて言ったんだと、最初は拒絶する気持ちで舌を押し返した。なのにその舌を絡めとられて、頭ごと抱きかかえるようにキスを深められたら、じゅわりと脳までとろけてしまう。

予感があったが、やっぱり颯生はキスも上手かった。そして相手を、いいように溶かすテクニックに長けている。気づかないうちに徐々に内側に入り込まれるから、自分で焦るころには手遅れだ。

ただただ重い。颯生の身体も、コイツの送ってくる快感も。呼吸も思考も、身体 of 自由も押さえつけられて、感じるだけの生き物に変えられる。

「ッ、あああ、ま、っで、ダメ、イク、イク、またイクうううう.....ッッ！！」

逃げられない快感にどう抗えばいいか分からず、颯生に抱きつくしかない自分が惨めだ。俺を翻弄する相手から遠ざかるべきなのに、すがる場所がないから彼を頼ってしまう。違う、抱きついてる場合じゃない。俺は早く逃げなきゃなのにと歯を食いしばっても、頭を撫でて甘やかす手と、前立腺を怖いくらいに押し込む熱の刺激が正反対で、脳内が処理できずに悲鳴を上げていた。

無理だ、コイツの手に触れられると、何も分からなくなる。抵抗ってどうしたらいいんだっけと、意味の分からない思考になる。

ああ、ダメだ、またイカされる。何もできないまま、また中だけで絶頂に至ってしまう。

「んっ、ん、んんンン...っ！！っひ、あ、あゝ あああああああああっ！！」

がくん、がくんと上下に腰が揺れた。下半身が大きく痙攣して、自分の意識に反した動きを繰り返している。自らの意識を保つための手段が、颯生の背に腕を回して抱きつく以外にない。そんなことをするから、颯生がまた調子に乗るのに。俺が離れないせいで、もっと奥まで入れられてしまうのに。悔しい、こんなはずじゃないのにと心で拒んでも、身体は颯生に落とされていた。

「う、ッ、は、はう、や、やあ、だ、え、も、だ、だめ、っ、んんん！」

加えて言うなら、限界まで上り詰めているのは俺だけだ。颯生は最初からずっと、一定のペースを崩さない。今も汗ひとつ流さず、穏やかに腰を動かしている。俺だけが、ひぎ、とひきつった声を上げながら、コイツの背中に爪を立てていた。その痛みですら動じない颯生は、ぬちっ、ぬりりとゆっくり入り口から奥までを擦ってくる。彼のスローなペースに惑わされて、うっかり感じたら終わりだ。だってこれは延々と続く、長い絶頂へのスタートラインなのだから。擦るな、もう擦るなと首を振った。少しくらいは動く手足で叩いたり蹴ったりもした。けれど頑丈な檻にはヒビひとつ入らない。抵抗する俺の体力ばかりが削られて、プライドごと地面にねじ伏せられていく。

「うあ、あああああ.....！！あああう、うんんっ、ッ、ひ、ひううっ！んは、はっ、あゝ ああああ...！！」

「ずっとガクガクしてるね。もしかして、さっきからイキ止まらなくなってる？」

「ひあ、あ、あう、ンンンッ、ッ、っっ！」

「答えられないか。ミサキのとろんってイキ顔がかわいいから、このまま抱きつぶしたくなるなあ」

「はく、ッ、あゝツツツ！！！」

うっとり息を吐きながら、余裕たっぷりに引き抜かれるのが、ありえないくらい気持ちいい。それを自覚するほど苦しい。まだそんなおっさんじゃないくせに、クソねちっこい責め方しやがって。死ぬ、もういい、終わりたいと強く願っているのに、カリで前立腺を引っかかれると言葉が吹き飛んでいく。

このまま抱きつぶしたいなんて、とんでもない発言だ。でも颯生ならできるだろう。俺を骨の髄までかみ砕いて、舐めしゃぶって、真の芯まで食らいつくすことが。

だからじゃれあいの中イキは、まだまだ序章だと思い知らされる。一か所だけの刺激なんて、生ぬるくらいなのだと。

「ミサキはここでもイキたい？」

「ひううう！！？ふああ、あ、あっ、あああっ！！」

ぬるる、と熱の側面を手のひらで撫でられたとき、颯生の手引っ張られるように腰が浮いた。まるで欲しがりな腰つきをした自分が恥ずかしい。今触るのは卑怯だ、俺が絶対感じるって分かってるくせにと、髪をシーツにぶつけて止めるよう訴えた。それでも止まらない颯生の手を捕まえるために、俺は彼の背中に回していた手を自分の股間に伸ばす。

「だ、め、イク、イクからあっ！んひっ、ッう、それ、やめろ、やめろっ！」

「そんなこと言わずに触らせて？」

「いや、やああゝあああああっ！」

だけれど、颯生が俺より強い要素は上げればきりがなかった。股間を守るために伸ばした両手を片手でまとめられて、頭の上で固定される。両手なら勝てるかと思ったけれど、全力で力を出しても敵わない。だめだ、力が強すぎて振りほどけない。でも、大事なところを守れなかったら、俺は。

「うあ、ああ、やっ、やだああっ！！あう、うゝ、イク、イクイク
クッッ！！出る、つも、あ、あああああっっ！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー